離乳食場面に見られる親子の相互作用の特徴とアタッチメント安定性との関連性

――アタッチメント安定性の高低の子どもとその親のケースの比較――

福田　佳織・尾形　和男・森下　葉子
（東洋学園大学）　（埼玉学園大学）　（文京学院大学）

和文要約

本研究の目的は、乳児と親の相互作用に見られる特徴を捉え、それらが後の子どものアタッチメント安定性にどう関与するのか検討することである。そのため、まず、生後９ヵ月以内の乳児のいる家庭を訪問し、母親および父親が乳児に離乳食を与える様子をビデオ撮影した。そして、その対象児が２歳前後の時点で再度家庭訪問し、親へのアタッチメント安定性をAQSにて測定した。うち安定性得点が最高点の子どもとその親（ケースＡ）および最低点の子どもとその親（ケースＢ）を各１組抽出し、離乳食場面での親子のやり取りの相違等を検討した。その結果、親の情動表出に関して両者に大きな相違は見られなかったが、ケースＡの子どもの方がポジティブ・ネガティブともに情動表出が明瞭であること、ケースＢの親子間でポジティブな情動表出率に大きな開きがあることが示された。また、ケースＡの親の方が子どもの情動表出への対応バリエーションが豊富であった。これらの親の対応は、子どもの特徴から影響を受けることも示された。

キーワード

アタッチメント　敏感性　情動　離乳食　乳児

問題と目的

これまで､アタッチメントの質の予測因として最も重視されてきた要因の一つが親の敏感性である。特に生後２年間における母親の敏感性は、その後の子どもの言語能力や協調性、従順さ、アタッチメント等、様々な能力の予測因となっている（Beijersbergen et al., 2012 ; NICHD Early Child Care Research Network, 2001, 2004, 2008 ; Sroufe et al., 2005）。敏感性とは、養育者が乳児のシグナルに気づき、正しく解釈し、適切かつ迅速に対応するという親側の能力を指す（Ainsworth et al., 1978）。しかしながら、子どものアタッチメントに及ぼす母親の敏感性の影響力はそれほど大きくなく（Goldsmith & Alansky, 1987）、メタ分析において、その効果量がわずかｒ＝.24であることが明らかにされた（De Wolff & van IJzendoorn, 1997）。

その要因の一つに敏感性の多義性（近藤ら，2006）があると言われ、近年では、敏感性の様々な派

生概念とアタッチメントとの関連性も検証されている（篠原，2015）。例えば、内省機能（reflective function）（Fonagy et al., 2002）、洞察性（insightfulness）（Oppenheim, et al., 2001）、心を気遣う傾向（mind-mindness）（Meins et al., 2013）などが挙げられる。

確かに、これらの概念とアタッチメントとは関連性が見られるが、いずれの概念も親の特徴に着目している。果たして、親の特徴のみが子どものアタッチメントに影響を及ぼすのであろうか。そもそも、子どもが形成するアタッチメントであるにもかかわらず、子どもの特徴が考慮されていないことは疑問である。子どもの特徴が親の養育行動に影響することは必至であり、例えば、乳児に対する母親の敏感性は、乳児の順応性から影響を受け、乳児の順応性が低いほど母親の敏感性が高くなるという報告（福田, 2004）も見られるなど、子どもから親への影響を示す報告は少なくない。つまり、子どものアタッチメントには、親のみならず、子どもの特徴も踏まえた分析が必要ではないかと考えられる。では、親および子どもの特徴のどのような側面に着目すればよいだろうか。その手掛かりとなる概念として、情緒的利用可能性（emotional availability）[注1]（Mahler, Pine, & Bergman, 1975）がある。これには、上述した敏感性の拡大概念が含まれており、Biringen & Easterbrooks（2012）によれば、「親の敏感性」は以下のように説明されている。「これはアタッチメントにおいても重要視された要素であるが、ここでは、二者関係の情動性の側面から敏感性を捉える。例えば、子どもが強く反応しているにもかかわらず親が適切に関わらなければ敏感性は低いと評定されるが、それだけではなく、親が一見適切に関わっているように見えても、子ども側が離れたり反応したりしなければ、やはり敏感性が高いとは評価できない。また、言語的感情表現と非言語的感情表現が不一致の場合、敏感性が低く評価される。例えば、笑顔だが声のトーンが冷たい、ポジティブな言葉に対して感情が平板、表情はポジティブだが声の調子が焦っているなどがそれにあたる。行動と言語・非言語表現が不一致の場合も同様である。さらに、子どもの感情表現を認識し、それに対して親が適切に反応することも重要であり、やり取りのタイミングやリズム、柔軟性、バリエーション、創造性への同調、子どもを受け入れる姿勢などにも着目する。」つまり、ここでいう「親の敏感性」は、養育者と子どもの二者が情緒的に健全な関係を築ける能力に着目して、子どもの特性にも焦点化するところに特徴がある（Biringen et al., 2014）。また、アタッチメントの発動と収束の中心にネガティブな情動状態が置かれるのに対し、この情緒的利用可能性は、ネガティブな情緒とポジティブな情緒の両面に同調することを強調する（Emde & Easterbrooks, 1985）という点でAinsworthらの敏感性と相違が見られる。

本研究では上記の視点を参考に、親子の相互作用場面に見られる行動の記述を行う。そして、それらの記述に基づき、①子どもと親のネガティブ・ポジティブ各々の情動表出の割合、②子どものネガティブ・ポジティブ各々の情動表出時における親の対応カテゴリーとその表出の割合を算出する。

では、子どものアタッチメントに影響する親子の特徴を捉えるにあたり、適した対象児の年齢（月齢）はいつ頃であろうか。また、親子の相互作用はどのような場面をとりあげるのがよいであろうか。アタッチメントの発達は、誕生時からの養育者等とのやり取りを通して形成される。そして、生後6，7ヵ月頃からその子どもにとっての初期のアタッチメント人物が定まり、徐々にその人物に対するアタッチメントの質の個人差が明確になる。アタッチメントの個人差の測定に用いられるストレンジシ

チュエーション法（SSP）やアタッチメントQソート法（AQS）は、いずれも対象年齢が1歳からとなっており、その時期にアタッチメントの個人差が明確になることがわかる。したがって、アタッチメントへの影響を検討するには、アタッチメントの質の形成途上にある月齢、つまり、1歳未満の子どもとその親の相互作用を観察することが適しているであろう。また、親子の相互作用場面としては、親にとって葛藤的な状況を用いることで、敏感性はより正確に測定される（Smith & Pederson, 1988）といわれている。ベネッセ教育総合研究所（2018）によれば、幼い子どもを持つ母親にとって、「離乳食・幼児食の与え方」は子育ての悩みで最も高く挙がるという。離乳開始期である生後5，6ヵ月頃を過ぎると、乳児は意思をもって行動することができるようになる。食事への集中が切れたり、眠くなったり、じっとしていたくなくなったり、食べたくなかったりすると、乳児は、あらゆる摂食外行動（親が口元に運んだ食べ物を食べない行動）を示して食事を中断しようとする。福田・森下・尾形（2020）は、乳児への食事供給行動（食べ物を乳児の口元に運び、食べさせようとする行動）に対する乳児の摂食行動（口に入れ飲み込む行動）は、個人差は大きいものの父母ともに3割程度であることを示した。このように、離乳期における食事場面では乳児はあらゆる欲求を示すため、親に葛藤が生じやすい場面と言える。つまり、離乳食場面における親子の相互作用を観察することが適していると考えられる。ただし、池谷・柳沢（2017）によれば、子どもの手づかみ食べ得点が最も高い月齢は生後10ヵ月であるという。離乳食の大半を子どもが手づかみで食べる状況と親が子どもの口に運ぶ状況とでは、親の葛藤内容が変わってくる可能性がある。そこで、できるだけ状況の統一を図るため、対象児の月齢の上限は生後9ヵ月までとする。

そして、アタッチメント安定性への影響を検討するため、上記の月齢で離乳食場面の観察に協力いただいた親子には、対象児が2歳前後になった時点でAQS（Waters & Deane, 1985）を用いてアタッチメント安定性を測定する。その中で、最もアタッチメント安定性の高かった子どもとその親、最も低かった子どもとその親を抽出し、その2組の離乳食場面での親子の行動を分析対象とする。アタッチメント安定性が大きく異なる2名の子どもとその親おいて、離乳期に見られた特徴の相違を抽出することで、アタッチメントに影響を及ぼす可能性のある親子の特徴を検討する。

方法

(1) 対象者

関東圏在住で、対象児が離乳食期（離乳食開始期～生後9ヵ月）に離乳食場面の観察を終え、その後、対象児が2歳前後でアタッチメント安定性の測定を実施した親子19組（父子10組、母子9組）のうち、アタッチメント安定性が高かった上位1組（r＝.833）（ケースAとする）、下位1組（r＝.250）（ケースBとする）である（AQSでは、典型安定型との相関（z変換）がr＝.300以上で安定型、それより低い場合が不安定型とされており、今回のケースは、それぞれ安定型と不安定型に相当する）。調査は父子、母子に対して行ったが、ケースA、ケースBはいずれも母子の組み合わせとなった。母親の年代はケースAが20代、ケースBが30代、子どもの性別はいずれも女児、子どもの年齢は、離乳食場面観察時はいずれも生後8ヵ月、アタッチメント安定性測定時は、ケースAが2歳6ヵ月、ケー

スBが1歳9ヵ月であった。

(2) 調査期間

2017年9月1日～2020年2月2日に調査を実施した。

(3) 調査手続き

離乳食場面の観察調査については、著者の知人等を通して協力者の候補となる家庭に調査の概要を伝えた。そして、概ね了承を得た家庭に対し、著者よりメールまたは電話連絡をした。その際、調査の詳細について書かれた説明書をメール添付または郵送し、その後、協力者の質問に応じた。その上で、調査協力を了承した家庭と調査日時のアポイントを取り、その日時に調査者が1人で家庭訪問した。訪問時、調査者から今回の調査についての詳細を再度説明し、了承を得た場合に調査承諾書に署名をもらった。家庭訪問では、観察調査（ビデオ撮影）、および、質問紙調査、インタビュー調査を行った（順番は、協力者の都合によって異なる）が、本論文では、観察調査データのみを使用するため、質問紙調査、インタビュー調査の内容は割愛する。ただし、質問紙調査により得られた属性に関する情報（親の年代、および、子どもの月齢・性別）は使用する。

撮影は調査者が行った。撮影にあたっては、食事を与える親と乳児の二人きりの場面とすること、食事を食べきる必要はないこと、時間の制限を設けないことを説明した。撮影は、親子の顔ができるだけよく見える場所からなされた。

続いて、アタッチメント調査については、対象児が2歳前後の年齢に至った時期に、調査者から対象者に連絡し、離乳食場面の観察調査と同様の流れで協力の承諾を得た。そして、アポイントの日時に調査者2名で家庭訪問し、家庭内外で1時間半～2時間のAQSを実施した。観察中は適宜メモを取り、観察後、調査者はそれぞれ独立に評定を行った。二者間で大きく評価の異なった項目は話し合いにより調整し、最終的には両者の平均値を用いてAQS得点を算出した。

(4) 分析方法

分析映像の長さを統一するため、離乳食場面の開始から1分間、食事時間の中盤1分間、食事終了までの1分間の計3分間を分析対象とし、そこで見られる親および子どもの行動の特徴を時系列で記述した。ただし、対象の親子以外の者が入ってきた場面（父親が途中で入室など）の時間は含めなかった。

記述内容は、「親の敏感性」の特徴が捉えられるよう、①親の身体的な動き、②親の発話内容、③親の発話のトーン、④親の視線、⑤親の表情、⑥子どもの身体的な動き、⑦子どもの発声、⑧子どもの表情、⑨子どもの視線とした。③⑤⑦⑧については、ポジティブ、ニュートラル、ネガティブの3種について記述の上、強弱がわかるよう「わずかに、いくぶん」等の表現も用いた。記述は親と子どもの行動が交互になるようにし、記述と記述の間はすべて1秒未満とした。記述する上で、親と子どものいずれが先行刺激になっているのかわかるように留意した。そのため、記述と記述の間隔は均等にはなっていない。また、親の発話については、親の1ターン内に収まらない場合、次の親のターンに続きの発話内容を記述した。続く子どものターンで親の発話が終わってしまう場合は、親の1ターン内に発話内容をすべて記述した。また発話を2ターンに分ける場合は、意味がわかるよう区切って記

述した。

いずれのケースにおいても、第一執筆者が行動コーディングシステム（BECO2）を用いて動画をコマ送りし、秒数（コンマ1/100まで）を記載、確認しながら行動を記述した。また、親子のやり取りの流れと記述に齟齬が生じないよう、繰り返し、通常速度でも動画を流して確認した。

これらの記述を終えたのち、第二執筆者、および、第三執筆者がこれらの記述と動画を確認し、記述の過不足や誤り等についてチェックした。記述内容に疑義があった場合は、三者で動画と記述を確認し、話し合いによって記述の修正を行った。

これらの記述に基づき、本研究では、親子それぞれのネガティブ・ポジティブ情動表出の頻度（率）の算出、子どものネガティブ・ポジティブ情動表出それぞれへの親の対応についてのカテゴリー作成、各カテゴリーの頻度（率）の算出を行った。そして、ケースＡとケースＢの親とでどのような相違が見られるか検討した。

(5) 人権の保護及び法令等の遵守への対応

調査にあたっては、対象者に「研究に関する説明書」（本研究の目的や内容、データの扱い、謝金、データ撤回等についての詳細が書かれた書類）を手渡し、調査者がそれを読み上げる形で対象者が確認した。これらの内容に十分な理解と了解を得られた場合に限り、「調査承諾書」への署名をもらい、調査に参加してもらった。また、承諾後も、協力者には何の不利益もなく、いつでもデータを消去できる自由があることを説明し、撤回書も配布した。

結　果

上記の通り、3分間の記述を行ったところ、ケースＡは347記述（親記述174、子ども記述173）、ケースＢは346記述（親記述173、子ども記述173）で、ほぼ同様の記述数となった。

(1) 親および子どものネガティブ、ポジティブ情動表出の割合

親、子どもとも、１つの記述内に、ネガティブな発話・発声・表情とニュートラルな発話・発声・表情という情動の異なる種類の組み合わせが見られた。しかし、ポジティブな発話・発声・表情とネガティブな発話・発声・表情という真逆の情動の組み合わせは見られなかった。Biringen & Easterbrooks (2012) によれば、言語的感情表現と非言語的感情表現が不一致の場合、敏感性が低く評価されるが、今回、そうしたエピソードは見られなかった。１つの記述内に発話・発声・表情のいずれかによるネガティブな情動表出、ポジティブな情動表出が見られた場合、それらの情動表出が１回あったとカウントされた。ケースＡとケースＢの親および子どもの序盤、中盤、終盤、全体のネガティブ情動記述、ポジティブ情動記述、および、表情が見えなかった記述の頻度（%）をTable 1に示した。なお、子どものネガティブな情動表出に合わせて、親がネガティブな表情の模倣をした場合もネガティブにカウントした。

Table 1から、全体としては、ケースＡ、ケースＢの親のネガティブ情動表出、ポジティブ情動表出の率は大きく変わらないが、子どもにおいては、ケースＢに比べてケースＡの方が、ネガティブ情動もポジティブ情動も表出率が高いことがわかる。つまり、アタッチメント安定性の高いケースＡの子

どもは、情動表出が明瞭であることが窺える。また、ケースＢにおいては、親子のポジティブ情動の表出率に大きな開き（親が61.3%、子どもが16.2%）があり、このズレの大きさだけでも、両者のポジティブ情動の表出が連動していない可能性が窺える。

Table 1　各親子のネガティブ、ポジティブな情動表出の割合

	序盤(A親子各67、B親55子54)						中盤(A親55子54、B親57子58)						終盤(A親子各52、B親子各60)						全体(A親174子173、B親子各173)					
	親			子			親			子			親			子			親			子		
	N	P	情動不明	N	P	情動不明	N	P	情動不明	N	P	情動不明	N	P	情動不明	N	P	情動不明	N	P	情動不明	N	P	情動不明
A (%)	1 (1.5)	38 (56.7)	3 (4.5)	14 (20.9)	28 (41.8)	3 (4.5)	1 (1.8)	26 (47.3)	1 (1.8)	18 (33.3)	16 (29.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	28 (53.8)	0 (0.0)	11 (21.2)	25 (48.1)	0 (0.0)	2 (1.2)	92 (52.9)	4 (2.3)	43 (24.9)	69 (39.9)	3 (1.7)
B (%)	0 (0.0)	31 (56.4)	0 (0.0)	3 (5.5)	9 (16.7)	2 (3.7)	0 (0.0)	41 (72.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	13 (22.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	34 (65.4)	0 (0.0)	6 (10.0)	15 (25.0)	3 (5.0)	0 (0.0)	106 (61.3)	0 (0.0)	18 (10.4)	28 (16.2)	5 (2.9)

Table 2　子どものネガティブ情動表出に対する親の対応カテゴリー

	対応カテゴリー	概要	ケースA	ケースB
1	身体接触	ぐずりや泣き等に対して、身体接触を伴う対応をする。	3(7.3)	0(0.0)
2	アイコンタクト	子どもが親を見ている場合に、親が子どもに視線を向ける。	6(14.6)	2(11.1)
3	情動の模倣	子どもが示す泣きや悲しい表情を模倣して示したり、子どもが示す不満に合わせて同様のトーンで発話したりする。	5 (12.2)	0(0.0)
4	大げさなリアクション	子どもの動きや発声等に対して、大げさに驚いたりして見せる。これがある場合は、ポジティブトーンでの発話・応答があってもカウントしない。	0 (0.0)	2(11.1)
5	ポジティブトーンでの発話	子どもは発声していないが、明るいトーンで発話する。	8(19.5)	5(27.8)
6	ポジティブトーンでの応答	子どもが何らかの発声をしているのに対して、明るいトーンで返答する。	12(29.3)	0(0.0)
7	ニュートラルトーンでの応答	ネガティブな情動表出に対して、通常のトーンで発話する。	2(4.9)	0(0.0)
8	ポジティブ表情での対応	子どもが親を見ている場合に、親がポジティブな表情を子どもに示す。	2(4.9)	1(5.6)
9	意識の転換	意識が食事に向いていない子どもに対し、意識が食事に向くように、言葉をかけたり、関連物を提示したりする。	5(12.2)	1(5.6)
10	要求への対応	子どもの要求が明確な場合に、それに応じる行動を取る。	1(2.4)	0(0.0)
11	代替案・代替物の提示	子どもが欲するものの代替物や子どもがしたいことの代替案を提示する。	4(9.6)	0(0.0)
12	見守り	子どもが親を見ていない場合に、親が声を掛けたり行動を起こすことなく、子どもを見ている。ポジティブ表情であっても、子どもが見ていない場合はここに含める。	4(9.8)	8(44.4)
13	対応なし	子どものネガティブな情動表出に直接関係するような対応をしない。	10(24.4)	2(11.1)

(2) 子どもの情動表出に対する親の対応

子どもがネガティブな情動を表出した際の親の対応、子どもがポジティブな情動を表出した際の親の対応を記述し、それらの内容からカテゴリーを作成した。1つの情動表出エピソードに対して、親は複数のカテゴリーを同時に含んだ対応をしていることもあったため、全体の数値は100%にはならない。

まず、子どものネガティブ情動表出に対する親の対応カテゴリーは以下の通りである（Table 2）。全カテゴリーは13種であり、ケースAの親が12種、ケースBの親が7種の対応バリエーションを示した。具体的に、ケースAには見られケースBには見られないカテゴリーは、「身体接触」（ただし、ポジティブ情動表出への対応においてはケースBにも見られる）、「情動の模倣」、「ポジティブトーン

Table 3　子どものポジティブ情動表出に対する親の対応カテゴリー

	反応カテゴリー	概要	ケースA	ケースB
1	情動の共有	子どものポジティブ情動表出を見聞きして、微笑んだり、笑ったりする。アイコンタクトの有無は関係ない。	15 (21.1)	8 (28.6)
2	ポジティブトーンでの発話	子どもは発声していないが、明るいトーンで発話する。	13 (18.3)	8 (28.6)
3	ポジティブトーンでの応答	子どもが何らかの発声をしているのに対して、明るいトーンで返答する。	9 (12.7)	0 (0.0)
4	ニュートラルトーンでの発話	子どもは発声していない状態で、通常のトーンで発話する。	6 (8.5)	0 (0.0)
5	ニュートラルトーンでの応答	子どもが何らかの発声をしているのに対して、ニュートラルトーンで応答する。	1 (1.4)	0 (0.0)
6	意識の転換	食事に意識が向いていない子どもに対し、意識が食事に向くように、言葉をかけたり、関連物を提示したりする。	10 (14.1)	4 (14.3)
7	身体接触	子どもの身体に触れる。	1 (1.4)	1 (3.6)
8	アイコンタクト	子どもが親を見ている場合に、親が子どもに視線を向ける。	11 (15.5)	5 (17.9)
9	大げさなリアクション	子どもの動きや発声等に対して、大げさに驚いたり、おどけた表情をして見せたりする。これがある場合は、ポジティブトーンでの発話・応答があってもカウントしない。	4 (5.6)	3 (10.7)
10	発声の模倣	子どもの発声を模倣して発声する。これがある場合は、ポジティブトーンでの発話・応答があってもカウントしない。	1 (1.4)	0 (0.0)
11	要求への対応	子どもの要求が明確な場合に、それに応じる行動を取る。	1 (1.4)	0 (0.0)
12	阻止	子どもの要求を言葉や行動で阻止する。	4 (5.6)	0 (0.0)
13	見守り	子どもが親を見ていない場合に、親が声を掛けたり行動を起こすことなく、子どもを見ている。ポジティブ表情の場合は「情動の共有」に含め、ここには含めない。	2 (2.8)	5 (17.9)
14	反応なし	子どものポジティブな情動表出に直接関係するような反応を示さない。	20 (28.2)	8 (28.6)

での応答」、「ニュートラルトーンでの応答」、「要求への対応」、「代替物・代替案の提示」が挙げられる。そして、ケースBに見られケースAに見られないカテゴリーは、「大げさなリアクション」（ただし、ポジティブ情動表出への対応においてはケースAにも見られる）が挙げられる。このように、ケースAの親の方が、子どものネガティブな情動表出への対応バリエーションが豊富であることが窺える。また、表出率に10％以上の差が見られるものには、「情動の模倣」、「ポジティブトーンでの応答」、「対応なし」（以上は、ケースAに多い）、「見守り」（ケースBに多い）の4種が挙げられる。

次に、子どものポジティブ情動表出に対する親の対応カテゴリーは以下の通りである（Table 3）。全カテゴリーは14種であり、ケースAの親が14種、ケースBの親が8種の対応バリエーションを示した。具体的に、ケースAには見られケースBには見られないカテゴリーは、「ポジティブトーンでの応答」、「ニュートラルトーンでの発話」、「ニュートラルトーンでの応答」、「発声の模倣」、「要求への対応」、「阻止」が挙げられる。ケースBに見られケースAに見られないカテゴリーはなかった。このように、ポジティブ情動に関しても、ケースAの親の方が、乳児の情動表出への対応バリエーションが豊富であることが窺える。また、表出率に10％以上の差が見られるものには、「ポジティブトーンでの応答」（ケースAに多い）、「見守り」（ケースBに多い）の2種が挙げられる。

考　察

(1) 親および子どものネガティブ、ポジティブ情動表出の割合とアタッチメントについて

アタッチメント安定性得点の高い子どもとその親（ケースA）、低い子どもとその親（ケースB）について、親および子どもの情動（ネガティブ、ポジティブ）の表出率を算出したところ、ケースA、Bの親はともにポジティブ情動表出率が高く、ネガティブ情動表出率が低いという類似の特徴が示された。一方で、ケースAの子どもはポジティブ、ネガティブ両情動の表出率が比較的高く、ケースBの子どもは両情動表出率が比較的低いことが示された。

Ainsworth et al.（1978）の示す養育者の敏感性は、養育者の能力とされるが、それでも、養育者が乳児のシグナルに気づき、正しく解釈するという側面は、子どものシグナルの明瞭さも関与すると推測できる。つまり、情動表出が明瞭であるという子どもの気質は、親にその情動や意図を気付かせ、より正確に解釈してもらうために有利に働くといえる。

乳児の気質と親の養育行動の関連に関しては、気質がより扱いやすい場合に母親の育児ストレスが低減され、望ましい養育行動を行うということを示す先行研究が多くみられる（例えば，水野，1998；谷向，1999）一方で、母親が乳児の気質を扱いにくいと感じると、子どもにフィードバックを多くするなど働きかけが増すという報告もなされている（例えば，上村・大場・田島・西沢・山崎，1989）。福田（2004）においても、離乳食を除いて順応性が低い乳児ほど、その母親の敏感性が高いことを報告している。こうした相反する結果は、扱う気質の切り口に問題がある可能性も考えられる。Thomas & Chess（1977）の気質分類によれば、扱いにくい気質には「反応が激しく、ネガティブな行動（泣きなど）が多い」といった特徴があり、扱いやすい気質は「ポジティブな行動（楽しがるなど）が比較的多い」とあり、ネガティブ・ポジティブの両情動とも表出が明確であるという特徴に該当する気質

分類は見当たらない。アタッチメントと乳児の気質の関連性について検討するにあたっては、今後、こうしたシグナルの明瞭さが親の敏感性を高め、それがアタッチメント安定性の高さに関与するという可能性にも着目することが必要であろう。

(2) 子どもの情動表出に対する親の対応とアタッチメントについて

離乳食場面から、子どもがネガティブ情動・ポジティブ情動を表出した際の親の対応を記述し、それらの内容からカテゴリーを作成した。その結果、ネガティブ・ポジティブともに、ケースAの親の方が、対応バリエーションが豊富であることが示された。先述のBiringen & Easterbrooks（2012）の「親の敏感性」の説明において、子どもの感情表現を認識し、それに対して親が適切に反応する上で、バリエーションに着目することの重要性も挙げられている。その点では、ケースAの親の敏感性が高いように見える。しかしながら、ケースBの親のバリエーションが、ケースAの親に比して豊富でなかった背景には、ケースBの子どもの特徴が関係する。ケースBの子どもには、あまり発声がみられなかった。「ポジティブトーン／ニュートラルトーンでの応答」は、子どもの発声（喃語や叫び声等）に応えた場合にカウントされる。そのため、そもそも発声の少なかったケースBの子どもに対して、上記の応答は生起しにくいと考えられる。同様に「発声の模倣」も生起しない。また、ケースBの子どもは、(1)で述べたように、ネガティブ・ポジティブともに情動表出率が低く、さらには、自分の要求を明確に示すような情動表出がほとんど見られなかった。そのような特徴により、親は自ずと「要求への対応」「代替案・代替物の提示」といった対応をする必要性が減退する。同様に、子どもの要求を「阻止」する必要性もなくなり、結果的にバリエーションが乏しくなる。つまり、親の対応のバリエーションは子どもの特徴に影響を受けるものであり、親のみの特徴として扱うことは、子どものアタッチメントと親の養育行動の関連についての結果のばらつきを生じさせる一要因となると考えられる。

次に、各ケースに特徴的な対応について検討する。まず、ケースAの親のみに見られた対応の一つに、「情動の模倣」がある。Fonagy et al.（2002）によれば、母親が乳児の情動表出に対して模倣的で誇張した表情を乳児に示すといった社会的バイオフィードバックが、乳児自身の情動のコントロールと認識の発達に寄与するという。これは、アタッチメント安定型の子どもは不安定型の子どもと比べて、情動を調整する能力に優れている（Berlin et al., 2008）こととも繋がる。また、自身の情動の認識の発達は他者を認識する能力との相関が示されており（酒井，2000）、他者の意図や思考を推察する認知的側面と不快情動を制御する情動的側面から構成される社会的コンピテンス（久木山，2012）を高める要因にもなりうる。アタッチメント安定型の幼児は、この社会的コンピテンスが高い（Freitag et al., 1996）という報告も見られる。これらのことから、乳児要因、親要因双方のが、子どものアタッチメントに関与することが推察される。

ケースBの親に頻出する「見守り」については、やはり子どもの特徴からの影響を受けていると考えられる。ケースBの子どもは、ネガティブ情動の表出において、激しく泣いたり、ぐずったりすることはなく、“いくぶん”ネガティブな情動を表出するに終始した。そのため、積極的な対応を取る必

要性が低くなり、子どもを見守りつつ親自らがポジティブに振る舞うという対応が目立った。ポジティブな情動表出についても、笑ったり、微笑んだりすることはなく、カメラや母親をじっと興味深く見つめる（興味関心によるポジティブさ）が多く見られた。そのため、そのような子どもの様子を見守るという対応が頻出したと考えられる。見守りという対応自体は、決して問題のある対応ではなく、次の対応の判断をより正確に下すための基盤となる。また、後述する回避型アタッチメントの養育者の特徴の一つにある統制しようとする働きかけと異なり、子どもの行動を尊重する対応と考えられる。

そして、双方の親に見られる特徴としては、ポジティブトーンで子どもに話しかけるという対応が挙げられる。特に、子どもがネガティブな情動表出をしている際も、親がその情動に過剰に巻き込まれたり、拒否したりする行動はほとんど見られなかった。Ainsworth et al.（1978）のストレンジ・シチュエーション法（SSP）において、回避型アタッチメントを示す子どもの養育者は、子どもが苦痛を示すと、それを嫌がり子どもを遠ざけるような関わりをするのが特徴である。また、アンビヴァレント型アタッチメントを示す子どもの養育者は、子どもの行動や感情状態を適切に調整することがやや苦手であるのが特徴である。こうした側面と比較すると、ケースＡのみならずケースＢの親の対応も、上記の特徴を有していないことがわかる。Biringen & Easterbrooks（2012）の「敏感性」の観察視点に挙げられている「子どもを受け入れる姿勢」となっているとも言えよう。

以上のことから、子どもの特徴とは独立した親の対応にもアタッチメント安定性に関与し得る特徴は見られるものの、子どもの特徴が親の対応に影響している側面も往々にしてあり、親子それぞれの特徴、および、両者間に見られる相互作用の特徴を視野に入れることの重要性が示唆されたと考えられる。

今後の課題

本研究の結果から、子どものアタッチメントに及ぼす要因を検証するにあたっては、親の特徴のみならず、子どもの特徴にも着目し、子どもから親に及ぼす影響をも捉える必要性が示唆された。

しかし、今回の分析対象は２ケースであることから、今後は、ケース数を増やして検証していく必要があると考えられる。また、Biringen & Easterbrooks（2012）の示す「敏感性」測定の観点として、やり取りのタイミングやリズムが挙げられているが、今回はそれらに触れなかった。この点も、今後取り扱っていくこととする。

注１）

情緒的利用可能性は、親の敏感性、親の構造化、親の非侵入性、親の非敵意性、子どもの反応性、親への子どもの関わりの６つの視点から構成されている。この情動的利用可能性尺度は、０～14歳の子どもおよびその親の特性を測定するものである。また、この尺度を用いた測定を行う場合は、特定のトレーニングと認証が必要であり、その受講者のみが尺度の詳細なマニュアルを入手することができる（International Center for Excellence in Emotional Availability（EA）® HP）。

謝辞

本研究の実施にあたり、科学研究費（基盤研究(C)(一般）課題番号17K04366，研究代表者：福田佳織）を受けた。また、調査の実施にあたり、ご協力を頂いた皆様に心より感謝申し上げる。

引用文献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. S., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Oxford: Lawrence Erlbaum.

Beijersbergen M., Juffer F., Bakermans-Kranenburg M., van IJzendoorn M. 2012 Remaining or becoming secure: parental sensitive support predicts attachment continuity from infancy to adolescence in a longitudinal adoption study. *Developmental Psychology*, 48, 1277-1282.

ベネッセ教育総合研究所 2018 乳幼児の生活と育ちに関する調査 2017 0-1歳児編 ベネッセコーポレーション

Berlin, L. J., Cassidy, J., & Appleyard, K. 2008 The influence of early attachment on other relationships. *Handbook of Attachment Theory, Research, and Clinical Applications, 2nd Edition*. Cassidy, J. & Shaver, P. R. (Eds). New York, Guilford, pp.333-347.

Biringen, Z., & Easterbrooks, M. A. 2012 The integration of emotional availability (EA) into a developmental psychopathology framework: Reflections on the special issue and future directions. *Development and Psychopathology*, 24(1), 137-142.

Biringen, Z., Derscheid, D., Vliegen, N., Closson, L., & Easterbrooks, M. A. 2014 Emotional availability (EA): Theoretical background, empirical research using the EA Scales, and clinical applications. *Developmental Review*, 34, 114-167.

De Wolff. M. S. & van Ijzendoorn, M. H. 1997 Sensitivity and Attachment: A Meta-Analysis on Parental Antecedents of Infant Attachment. *Child Dvelopment*, 68(4), 571-591.

Emde, R. N., & Easterbrooks, M. A. 1985 Assessing emotional availability in early development. In W. Frankenburg, R. N. Emde, & J. Sullivan (Eds.), *Early identification of children at risk. An international perspective* (pp.79-101). New York/London: Plenum Press.

Fonagy, P., Gergely, G., Jurist, E. L., & Target, M. 2002 The Social Biofeedback Theory of Affect-Mirroring: The Development of Emotional Self-Awareness and Self-Control in Infancy. *Affect Regulation, Mentalization, and the Development of the Self*. New York: Other Press LLC.

Freitag, M., Belsky, J., Grossmann, K., Grossmann, K. & Scheuerer-Englisch, H. 1996 Continuity in parent-child relationships from infancy to middle childhood and relations with friendship competence. *Child Development*, 67, 1437-1454.

福田佳織・森下葉子・尾形和男 2020 父親・母親の食事供給行動に対する乳児の摂食外行動の出現状況ー離乳食場面の観察からー　東洋学園大学紀要，28，33-44

福田佳織 2004 母親の乳児に対する敏感性と夫婦関係、ソーシャルサポート、乳児の気質との関連　学校教育学研究論集，9，1-12

Goldsmith, H. H., & Alansky, J. A. 1987 Maternal and Infant Temperamental Predictors of Attachment: A Meta-Analytic Review. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 55, 805-816.

池谷真梨子・柳沢幸 2017 保育所における手づかみ食べに対する取組みの現状と保育士からみた手づかみ食べの意義とその関連要因 日本家政学会誌，68(2)，70-79

International Center for Excellence in Emotional Availability (EA)® Research, Education, and Service. http://emotionalavailabilty.com（アクセス日：2021年8月23日）

上村佳世子・大場説子・田島信行・西沢弘行・山崎浩一 1982 発達初期の母子関係と子どもの発達＜その3＞ 日本教育心理学会第31回総会発表論文集，192

近藤清美・井上望・中野茂・草薙恵美子 2006 アタッチメントに関わる母親の敏感性概念の検討
北海道医療大学心理科学部研究紀要，2，13-24
久木山健一 2012 社会的スキルと社会的コンピテンス 速水敏彦（監修）・陳惠貞・浦上昌則・高村和代・中谷素之（編）コンピテンス個人の発達とよりよい社会形成のために（pp.109-118）ナカニシヤ出版
Mahler, M., Pine, F., & Bergman, A. 1975 *The psychological birth of the human infant*. New York: Basic.
Meins, E., Fernyhough, C., Arnott, B., Leekam, S. R., & de Rosnay, M. 2013 Mind-Mindedness and Theory of Mind: Mediating Roles of Language and Perspectival Symbolic Play. *Child Development*, 84(5), 1777-1790.
水野里恵．1998 乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連：第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究.発達心理学研究，9(1)，56-65
NICHD Early Child Care Research Network 2001 Child-care and family predictors of preschool attachment and stability from infancy. *Developmental Psychology*, 37, 847-862.
NICHD Early Child Care Research Network 2004 Father's and mother's parenting behavior and beliefs as predictors of child social adjustment in the transition to school. *Journal of Family Psychology*, 18, 628-638.
NICHD Early Child Care Research Network 2008 Mathers' and fathers' support for child autonomy and early school achievement. *Developmental Psychology*, 44, 895-907.
Oppenheim, D., Koren-Karie, N., & Sagi, A. 2001 Mother's empathic understanding of their preschooler's internal experience: Relations with early attachment. *International Journal of Behavioral development*, 25, 6-26.
酒井久実代 2000 情動認識力、語彙力、エモーショナル・インテリジェンスの構成要素間の関連性の検討　性格心理学研究，8(2)，79-88
篠原郁子 2015 Sensitivity の派生概念と子どもの社会的発達　ーアタッチメント研究からの展望ー　心理学評論，58(4)，506-529
Smith, P. B., & Pederson, D. R. 1988 Maternal sensitivity, and patterns of infant-mother attachment. *Child Development*, 59, 1097-1101.
Sroufe, L. A., Egeland, B., Carlson, W. A. 2005 *The development of the person: The Minnesota Study of Risk and Adaptation from birth to adulthood*. New York, NY: Guilford Press.
谷向みつえ 1999 子どもの行動特性が母親のストレス及び不適切な関わりに及ぼす影響 人文論集（関西学院大学人文学会），48，94-105
Thomas, A., & Chess, S. 1977 *Temperament and development*. New York: Brunner Mazel.
Waters, E., & Deane, K. 1985 Defining and assessing individual differences in attachment relationships: Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton, & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 41-65.